

## はじめに

二〇〇五年五月、私ははじめて旧日本陸軍第二師団の戦友会の「第二師団東京勇会」を訪ねた。第二師団の通称号は「勇」なので、戦友会名は「勇会」と呼ばれている。

第二師団は、福島県、新潟県、宮城県から編成された部隊である。元兵士やその家族や遺族、そして私のような「部外者」を合わせて、現在でも一〇名前後が月に一回平日の昼さがり（二時〜一五時）、靖国神社に近いオフィス街にある公益財団法人「偕行社」が入るビルの一室に集まり、戦場体験や時事問題や健康状況など思い思いの話題に花を咲かせる<sup>(1)</sup>。

東京勇会を私に紹介してくれた人物とは、第五六師団第一一三連隊の拉孟守備隊の「脱出将校」として私が聞き取り（二〇〇二年より二〇一三年）を続けた木下中尉である。全滅寸前の拉孟守備隊の金光守備隊長は、報告任務のため木下中尉に脱出を厳命。木下中尉は、米中連合軍の包囲網から後方の師団司令部に奇跡的に辿りついたのだ。

木下中尉と東京勇会の事務局長の水足中尉は、陸軍士官学校（以下陸士と称す）の同期（陸士第五六期）の間柄だ。陸士を卒業して少尉任官後、ふたりは師団こそ異なれども中国の雲南戦場でビルマルルート（援蒋ルート）遮断のために蒋介石軍と戦って生還した<sup>(2)</sup>。

通常、元軍人や遺族などの純粋な戦友会に、私のような「部外者」は容易に立ち入れないのだが、陸士の同期の紹介とあって特別に東京勇会に迎え入れてもらえた。

当初、私は数回拉孟戦の話の聞くだけのつもりで東京勇会を訪ねた。その頃、私と入れ替わるように、勇会の「お世話係」をしていた遺族の女性が家庭の事情で参加できなくなった。予期せぬことに、次期の「お世話係」として私に白羽の矢が立った。遺族でもない「部外者」が「役職」を与えられ、東京勇会の

「お世話係」を任されることになる。

気がつくとい五年もの年月が経ったが、いま思い返してみると、私が最初に訪ねた二〇〇五年は、東京勇会が「終わり方」を模索していた時期と重なる。

## 一、……戦友会とは何か？

戦友会は、元軍人と遺族らが戦没者の慰霊・顕彰と親睦を目的に戦後自然発生的に設立した。一九六五年から六九年に全盛期を迎え、一九七〇代頃から漸減し、一九八〇年代には三分の一に激減した。戦後五〇年から六〇年、すなわち一九九〇年代後半から二〇〇〇年代に、会員の高齢化を理由に解散する戦友会が相次ぎ、現在、元軍人が主体的に運営に関わっている戦友会はほとんどなくなった。

戦友会とは、軍隊において戦場体験や部隊への所属体験を共有した仲間の集まりである。しかし実際は千差万別な形態があり、明確に定義できない。連隊や中隊ごとの戦友会がオーソドックスな形態だが、全ビルマ会のようなビルマ戦線の各師団が結集した大規模な戦友会もあれば、東部ニューギニア戦友会やサラワク会（サラワクとは、マレーシアのボルネオ島にある州）など戦地ごとに集まる戦友会や少飛会（少年飛行兵の戦友会）など訓練機関（学校）や戦艦名などを名乗る戦友会もある。変わり種では、南方の戦場で捕虜になり収容所に入れられた仲間の戦友会もある。要するに、七十数年前の戦争で苦勞を共にした仲間を「戦友」と呼び、当事者にしかわからない心情を分かち合う場が「戦友会」なのだ。

戦友会の数や会員の把握は非常に困難である。ふたりの戦友が集い、それを当事者が「戦友会」と見なせばそれも立派な「戦友会」である。ひとりが複数の戦友会に所属することもよくあることだ。連隊や中隊ごとに細分化された戦友会が、戦友の高齢化による会員数の減少で、師団の名の下に統合される場合も

ある。まさに東京勇会も統合された戦友会であり、歩兵連隊、工兵第二連隊、搜索連隊などの各連隊が集まっている。このように誰が何を基準に戦友会と認識しカウントするのは甚だ不明瞭で、その数と会員の全体像を把握するのはほぼ不可能に近い。

戦友会とはあくまで任意の民間団体である。公的機関に設立の申請を出すわけでもなく、公的機関から資金援助があるわけでもない。戦友会の運営資金は、時には戦後に成功して財を成した「戦友」が多額の資金を寄付するケースもあるが、一般的には元軍人や遺族らによる会費と寄付が主な財源となる。

戦友会の主な活動とは、役職を決め、世話人（あるいは事務局）を中心に会員同士の交流と親睦をはかり、慰霊祭や慰霊旅行や遺骨収集活動に励むことが一般的な姿である。また、鎮魂碑や慰霊碑の建立を目的に浄財を集める活動をする会もある。彼らは手作りの会報や時に包括的な連隊史の編纂にも挑む。とはいえ、会報や連隊史も私家版で元軍人や遺族への頒布が目的なので一般の目に触れることはほとんどない。戦友会でのような活動がなされていたのか、そこで何が話されていたのか、その具体的な中身は長らくベールに包まれてきた。

このようにつかみどころのない戦友会について、総合的な学術研究を行った京都大学の研究者のグループ（戦友会研究会）がある。<sup>(3)</sup>このグループの二〇一五年の調査によると、彼らが把握している戦友会は三六二五を数える。その中の八八八人の戦友会世話人からアンケートの回答を得た。後述する第二師団勇会の事務局長の水足さんもこのアンケートの回答者のひとりだ。彼らの研究によると、一九六五年から六九年の設立の最盛期に、「その数は数千を数え、数十万人あるいは数百万人の人びとが戦友会に集う」とあるが、大規模な調査を経てもその数は漠然としかわからないのである（戦友会研究会編、二〇二二）。京都大学のグループは主に全盛期の戦友会を研究対象にした。戦友会の全体像がよくわからなかった時期に数回にわたって実施された同グループのアンケート調査の学術的な成果は大きい。その業績を十分に認

めた上で、将兵の心の機微や戦友会でも話せない本音はアンケート調査のような文字媒体には表しにくい点を指摘しておきたい。

また、一般的な聞き取りの注意点として、回答者が兵隊か下士官か将校か、階級によって回答の内容が異なる点にも留意したい。さらに大学教授らのインタビューでは、なかなか本音を語れないと話す元軍人がいる反面、新聞記者や権威ある人物にこそ饒舌に語りたがる元軍人もいる。女性には「慰安所」の話はしづらいなど、ジェンダーバイアスによる聞き取りの内容の偏りもあるだろう。したがってインタビューする人間が誰なのかを考慮しなくてはならない。

私は終焉期の戦友会を対象に元軍人の傍に黙って坐り続けた。こちらから聞きたいことを問うことは極力控え、老兵の話にひたすら頷いた。時に戦友会内で話せなくて別の場所でしか聞けない話もあった。あるいは家族を介してはじめて聞ける話もあった。ひとつの戦友会の限定的な内容を一般化できないことは承知の上で、研究者が戦友会の内部に立ち入って、元軍人やその家族や遺族に長期的かつ継続的に関わってきた体験は貴重なものだったと思う。何はともあれ、近い将来に戦場体験者がひとり残らず世を去り、戦友会も完全に消えゆくいま、もう二度と誰も七〇数年前の元軍人の「戦友会」を体験できないことだけは確かである。

## 二、……何を明らかにするのか

本論では、第二師団東京勇会の戦友会の「変容」に焦点を当てる。二〇一三年頃から、元軍人の遺族や縁者ではない「部外者」の三〇代から四〇代の「若い世代B」の会員の参加が契機となり、戦友会の活動の中身や元軍人の戦場体験の語りに変化が生じた。なお、二〇一〇年頃から参加した「若い世代A」と区

別して彼らを「若い世代B」とする。ここでいう「若い世代」とは、文字通りの若者だけでなく、九〇代の元軍人の目からみた「若者たち」が対象である。九〇代の元軍人からすれば子ども世代の六〇代、七〇代も「若い世代」として見なされる。本論で扱う「若い世代」とは原則として「部外者」を指す。私は「部外者」第一号だ。

戦場の非体験者の会員の増加にともなって、なかでも「若い世代B」の戦争の捉え方や参加の意図に疑問や違和感を唱える元軍人と遺族が現れはじめた。その一方でこうした「若い世代」の参加がその意図や歴史認識の如何にかかわらず、戦友会を活性化し、風化されつつある戦場体験の継承が実現できると評価する元軍人もいた。しかし、やがて「変容」を憂い、危惧した元軍人や遺族が「変容」した戦友会の参加を拒むようになり、二〇一六年九月、元軍人と遺族がひとりも参加しないという最悪の事態を招くことになる。

本論では戦場体験や戦友会に興味を抱く「若い世代A・B」の各々の意図や歴史認識や活動内容を検討し、元軍人や遺族の望む戦友会のあるべき姿から「変容」した戦友会の活動の中身を明らかにする。勇会の「変容」が深刻化する中、二〇一三年から参入した「若い世代B」や戦後七〇年（二〇一五年）で集まってきたジャーナリストたちを対象に、元軍人による用意された「武勇伝」の語りが頻繁に披露されるようになった。一方で、戦友会では語られない（語れない）戦場の語りは、場所と対象者を選んで限定的に語られるようになった。語りたくても語れない戦場体験者の葛藤や交錯した思いとは裏腹に、用意された「武勇伝」の語りから「非体験者（部外者）」は何を継承するのか。彼らはその「武勇伝」の語りを、戦友会での語りの「本音」と信じて継承する危うさに気づくことができない。

戦友会でも語られない（語れない）戦場の「本音」を非体験者（部外者）は果たしてどこまで知り得ることができなのか。あるいは「本音」を語る対象として選ばれる非体験者とは誰か。消えゆく戦友会の中

で非体験者は、繰り広げられた戦場体験者の多様な語りの中身の何をどのように継承するのか。それを選び取る非体験者の歴史認識と政治性との関係性はいかようか。ひいては戦友会における戦場体験の継承がいまに生きる私たちにどのような意味をもつのだろうか。

### 三、……………第二師団勇会のあゆみ

一八七三年、第二師団は仙台に「仙台鎮台」として創設され、一八八八年五月一日に兵制改革により「第二師団」に改編された。これを記念して、毎年五月一日に、第二師団（勇兵团）の永代神楽祭が靖国神社の本殿で行われる。

アジア・太平洋戦争期の第二師団の主な戦歴は、ジャワ・スマトラ作戦（一九四一年三月～八月）、ガダルカナル島作戦（一九四二年九月～四三年二月）、ビルマ戦線ではビルマ南部ベンガル湾沿岸警備（一九四四年一月～八月）、中国雲南省断作戦（ビルマルートの遮断一九四四年八月～十一月）、バーモ作戦（一九四四年八月～十二月）、イラワジ会戦（一九四五年二月～四月）、戦争末期に仏領インドシナでは明号作戦（仏印処理一九四五年三月九日、一日）に参加する。第二師団（勇兵团）のアジア・太平洋戦争期の戦歴の中でもガダルカナル島戦とビルマ戦線の戦死率は七割前後と非常に高い数字を示している。<sup>4</sup>

戦後二〇年を経て、あちこちで戦友会が雨後の竹の子のように設立された。一九六六年、全国規模の第二師団勇会（全国戦友会）が結成され、その支部として宮城県勇会、新潟県勇会、福島県勇会、東京勇会の四地区戦友会が設置された。

第二師団勇会の活動の目的は、顕彰と慰霊および会員の親睦であり、結成から半世紀にわたる主な活動は、月一度の例会や年一度の全国大会、遺骨収集、慰霊祭、慰霊旅行、慰霊碑建立などである。親睦会を